
『何でも屋』 3人の兄弟

山田太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『何でも屋』 3人の兄弟

【Nコード】

N8222A

【作者名】

山田太郎

【あらすじ】

3人の兄弟が営む『何でも屋』。だが、その3人の兄弟を影で殺そうとしている集団が現れる。果たして、3人の兄弟はどうなるのか……………

第一章『何でも屋』（前書き）

最後にキャラクター紹介を書きました。よかったら見てください。
なお、キャラクター紹介は随時また、書きます。

第一章『何でも屋』

『はあ。今日の仕事はかつたるいなあ。』

大きなため息を吐くたのは宮澤 みやざわ 和彦 かずひこ だった。

『かつたるいなんて言ったって仕方ないじゃん！こういう店なんだから！』

と言うのは、弟の慎也 しんや だった。

こういう店とは『何でも屋』のことだ。依頼料はかなり高いで評判だが、成功率はほぼ100%。かなり信用がある店だ。

『でもよう。何で今回は、俺だけなの？慎也も玲奈もいるだろ？』

和彦は、すかさず慎也に言った。
ちなみに、玲奈 れいな とは妹のことだ。

『だって、今回の依頼は夜逃げの手伝いでしょ。三人で行ったら目立つじゃん！それに、この間ジャンケンで負けたでしょ！』

和彦は前にジャンケンをして、負けたことを思い出した。

『うつ！ジャンケン何てしたっけ？』

『絶対したよ。ちゃんと記録つけてるからね。』

和彦は、忘れたフリをしようと思ったが、慎也の手帳にちゃんと書

いてあったので、あっさりと見破られてしまった。

『ああー分かった、分かった！やればいいんだろ！』

和彦がそう言うのと、慎也は首を縦に振って頷いた。

『何時までに行くんだっけ？』

『19時まで。』

『後2時間後か。』

つまらなさそうに、和彦は言った。

『愛刀持って行ってね。』

慎也は和彦に軽く言った。

『分かってるよ！』

和彦はそう言って、仕事の準備をした。

第一章『何でも屋』（後書き）

みやざわ かずひこ
宮澤 和彦

身長：180？

体重：70？

年齢：19歳

趣味：寝ること。

性格：マイペースで、やることなすこと文句を言っが、仕事になれば人一倍がんばる。

みやざわ しんや
宮澤 慎也

身長：173？

体重：58？

年齢：16歳

趣味：竜の角集め

性格：ノホホンとしている。が、戦闘となると……………

みやざわ れいな
宮澤 玲奈

身長：160？

年齢：16歳

趣味：友達と遊ぶこと

性格：明るく、活発な女の子。一番落ち着きがなくドジ。

ちなみに、慎也と玲奈は双子です。

第二章『夜逃げの手伝い』

くく2時間後くく

『お待たせしました。先日依頼された和彦です。斉藤さんですよ？何をお手伝いしたらいいでしょうか？』

仕事なのでいつもと話し方が違う和彦。

『あ、あの。まずは、タンスをトラックに入れてもらえませんか？』

斉藤さんは少し挙動不審なところがあった。

『分かりました。』

和彦は、言われた通りにタンスを運んだ。

『す、すごいですね！こんなに重いものを軽々と持ち上げるなんて！』

『いえいえ。大したことありません。』

この調子で着々と仕事をこなしていった。

仕事も終盤に差し掛かったとき、屋根から殺気を感じた。和彦は、

『斉藤さん、もう行っていていいですよ。ここからは、後でこちらから届けます。依頼料はそのときで。』

和彦は、依頼人を無理やり行かせた。

すると、さっきまで屋根にいた。人がおりてきました。そいつは、

黒いフードを被って男か女か分からないくらいだった。

『巻き込みたくないから行かせたんだ！優しいね。宮澤和彦君。』

声からするとフードを被った人は男だ。

『いや。戦うとしたら邪魔だからね。』

と、冷たく言った。

『やっぱり優しくないね。』

笑いながら男が言った。

『ところで何の用？』

和彦は男に冷たく言った。

『用は、お前たち兄弟と《ギラーシャームン》を潰すことだよ。』

《ギラーシャームン》それは、和彦が14歳のとき兄弟で登録したところだった。『何でも屋』をするには、ここの協力なしではできないからだ。「これについては、三章のあとがきで」

『おいおい！何でそんなことすんだ？』

『そんなこと言えないなあ。』

男は和彦をバカにしながら、フードを脱いだ。腰には、長剣がある。

俺は、慌てて近くに置いてある愛刀に手を伸ばした。

第三章『僕はね…』（前書き）

書く時間がなかったので、書くのはまた今度…

第三章『僕はね…』

『それが、きみの愛剣？デカいね！なんて言うの？』

男は興味津々に聞いてきた。和彦の持っている武器は大剣だ。

『これは【宗互^{そうご}】だ。』

和彦が言った。ちなみに、この国には剣に名前がある。その名前によって能力が違う。火・水・風・氷・地・雷・光・闇の8種類ある。鍛錬すれば、普通の人でも4種類くらい能力が使える。まれに、それ以上使えたりする物もいるが…。

『そうなんだ。カッコいいね！僕のは【美灼^{びしゃく}祢】って名前だよ。いい名前でしょ？』

笑いながら話す男はとても不気味だった。

『お前なんて名だ？』

和彦も不気味に笑い返してやった。

『僕？僕の名前はクレイ・フィルカーだよ。この名前もいいだろ？』

クレイはそう言った後、腰にあった長剣に手を添えた。剣に手を添えたクレイは

『【美灼祢】！我に一時炎の力を与えよ！そしてこの大地を炎で焼

き尽くせ！」

と言った。すると、突然【美灼祢】の刀身が一気に燃え上がった。近くにいただけで暑すぎて倒れそうになった。

『大地に眠る大いなる力を、我に力を貸せ！【宗瓦】！』

そう言うと、和彦の周りの地面が揺れ始め、周りの温度が少し低下した。なぜかは、分らないが……
ちなみに、その剣の能力は、剣だけではなく、周りの物・環境にもできるのだ。

『んじゃー。そろそろ始めようか。前置きが長なってしまった。』

クレイがそう言った瞬間2人は同時にその場からいなくなっていた。

第四章『鬼人化』（前書き）

あとがきに和彦の使える技や説明を書いときます。

第四章『鬼人化』

カキン カキン カキン

目にも見えない早さで斬り合いをしている和彦とクレイ。

……しばらくして、2人が止まった。場所も、最初いたところより6kmも離れたところにいた。

『はあ、はあ。やっぱりあなたとやると疲れます。』

クレイは顔の汗を拭きながら言った。

『はあ、はあ。おまえ強いな。』

2人とも、少し息が切れていた。

『【美灼祢】！水霊に宿りし魂！我に癒やしを！』

クレイがそう言うと、斬られたキズや息切れがなくなった。
水の技は、ほとんどが回復系だ。

『【宗互】！癒しの水を我に！』

和彦も水の技で回復した。

『これではラチがあかないね。』

クレイがそう言うと、和彦の足下から突然足が出てきて和彦の足をつかんだ。

『は!』

油断した。少し距離があつたから大丈夫だと思っていた。

『これなら攻撃あたるよね。』

そう言うと、クレイは【美灼祢】の刀身を炎にした。
グサッ　グサッ　グサッ

和彦は刺されていくにつれて意識が遠くなってきた。

『和彦。こんな奴に苦戦してるのか? 情けないな。』

俺の心に語ってくる。

『お前だれだ? 何者だ?』

そう思ったら。いつの間にか記憶が飛んだ。

……

『お兄ちゃん! お兄ちゃん! 大丈夫?』

玲奈の声で目が覚めると、和彦は自分の部屋にいた。

『大丈夫だ。』

俺がそう言うと玲奈は良かった。と息をもらした。

『ところで、クレイはどうした?』

和彦は言った後、分からないよな。と思った。

『もしかして、お兄ちゃんの近くにあった死体のこと？』

和彦は、えっ！と驚きの顔した。

『誰がやったんだ？』

俺は、驚きを隠せなくて玲奈に言った。

『誰って？お兄ちゃんが殺したんでしょ！それにしてもハデに殺したね。顔が誰だか分からないくらいメチャクチャになってたよ。』

和彦はそれを聞いて驚いた。

『玲奈。俺疲れてるみたいだから寝かせてくれ。』

和彦がそう言うと、玲奈は頷いて部屋から出ていった。

和彦は玲奈が部屋から出て行った後、すぐ寝た。

第四章『鬼人化』（後書き）

く和彦の使う武器く

主に大剣。しかし、小剣も使える。

く和彦の使える技く

1 水の技Lv 3まで

2 地の技Lv 5

3 風の技Lv 4

4 雷の技Lv 4

5 光の技Lv 2

く技の説明く

Lv 1は最高12まで上がります。（ただし、光と闇は上位になると扱うのが難しく、間違えれば自分が自滅するかもしれないので、最高8までになっている。）

今のところの小説では、水の技は回復とかいてあるが、Lv 9、12になると、攻撃技も覚えます。

（どうやって技を覚えるかと言うと、それはまた後ほど。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8222a/>

『何でも屋』 3人の兄弟

2010年10月17日03時13分発行